



TITLE:

<批評・紹介>中國歴史簡編 吳澤  
著 中國史話 許立群著

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>中國歴史簡編 吳澤著 中國史話 許立群  
著. 東洋史研究 1950, 10(6): 515-516

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145863>

RIGHT:

中國の近代化と言つても、それは決して生易しい道程ではない。著者も言われるように、單なる歐米化などでも勿論ないし、まただからと言つて中國社會の新たな封建化などでも決してない。現實の中國社會の諸事情は、本書によつて強く主張されているような封建的諸關係によつて幾多の曲折を見また重苦しくそれを引きづりつつ、他方ではそれらの諸關係によつて益々鼓舞せられて、その特異な姿態を身に纏いながらも近代化の過程を前進しつつある事は言う迄もない所である。錢莊も勿論そういったものの域外にあるのではない。成程實弊の性格とかに現われた錢莊の前期的性格は、その強さに於て特長的であるには違ひない。しかしそれも翻えつて中國社會の非近代的構造、またそうであるが故に壓倒的にしかかつて来る帝國主義的勢力との必死の對決という現實に於いて、始めて理解せられ得るのではないかと思われる。從つて錢莊資本の逞ましさというものも、それは資本主義的近代に對する中國社會の東洋の性格の貫徹と言うよりも、如何に中國社會が非近代的構造を克服し切れないうで居るか、また非近代的な中國社會が帝國主義的勢力と對決する必然的結果として理解すべきものであらうと思ふ。そしてそれと共に、武漢に於ける反革命を契機とし、國府の抗日總力戰の呼號と相俟つて、中國社會の支配的階級が、本書によつて明らかにされているようにその封建的勢力との緊密な連繫、延いて封建的性格の強化という面の現われた事は、最も興味ある現象と言わねばならない。そう言つた中國社會の力關係の動きが、

本書に於いて甚だ一面的にはあつたが錢莊資本——中國金融資本の變轉のうちに明らかにされているのは中國革命史の研究の上に大きな寄與を爲すものと言ふ可きであらう。

甚だ勝手な事はかり述べさせてもらつたが、わたしは金融方面の事については文字通り全くの門外漢であるので、その方面に於いて本書の撥すべき意義については殆ど觸れるところがなかつた。從つて氏の中國金融資本に關する造詣の深さを充分に紹介する事を得なかつたのは、わたしも誠に遺憾と思ひお許しを願う次第である。

〔池田 誠〕

#### 中國歷史簡編

吳 澤 著

民國三十四年七月 重慶峨嵋出版社初版

十一月上海再版 二九八頁

#### 中國史話

許 立 群 著

民國三十五年一月 上海野草出版社刊

一四六頁

兩書ともすでに昭和二十一年、牧田諦亮氏から拜借して早速一讀過したまま、紹介の機会を逸してゐた。いづれも中日事變のなほたけなはなる最中に書かれたものであらう。著者の立場はそろつて唯物史觀にもとづいてゐる。

中國歷史簡編の著者吳澤氏は、早く民國二十四年「傳說中國夏代之經濟考」(經濟學報一ノ一)や二十五年「中國先階級社會之商業與賦稅雛形考略」(中國經濟四ノ三)などの社會經濟史關係の論文によつて、その名を承知してゐた。上海の復

且大學の教授で、中日事變後、大學の西遷とともに重慶に住んでをられたらしい。著者は數年來「中國歷史大系」を執筆中であるが、本書はそれを簡約して青年の自習讀物としたものであるといふ。構成は型のごとく、史前原始公社制社會、殷代奴隸制社會に始まり、次いで兩周秦漢より鴉片戰爭に至るまでを封建制社會とする。そのうち兩周を初期封建制社會、秦漢より唐までを專制主義封建制社會とし大地主經濟の繼續的發展にその特徴を認め、宋元より鴉片戰爭までを末期封建制社會として、小土地所有經濟が確立し自由商人も出現して内部に資本主義の萌芽を育生し始めた時代とする。鴉片戰爭以後七七抗戰までを半封建半殖民地社會として、そのうちに開始、形成、深化、崩壞の四過程を考へてゐる。これを以つてしても想像されるやうに内容は大體において平凡であり、相當の分量を占めてゐる古代の部分も郭沫若・呂振羽兩氏の古い著述の範圍を出てゐないやうである。本書の性質上やむをえないとはいへ、秋澤修二氏の「支那社會構成」や「東洋哲學史」を攻撃するだけに急で、新しい見解の見られないのはさびしい。

中國史話の著者許立群氏は如何なる人か知らないが、延安にをられたのではないかと思ふ。卷首に吳玉章氏の序言があり、通俗大衆に對して中國歷史の初步を簡單明瞭に理解させ、以つて民族的抗戰の一助たらしめようといふ意圖から編纂されたものであるといふ。内容は第一編原始公社到中央集權的封建制度的成立（遠古至秦）、第二編中央集權的封建國家成

立後向外侵略到外族内侵（漢至南北朝）、第三編封建經濟的發展到西洋資本主義的侵入（隋統一到清鴉片戰爭）の三部に分れてゐるが、この區分は延安の中國歷史研究會の編した「中國通史簡編」によつたこととわつてゐる。本書の第一編はかつて民國二十九年末の「中國青年」誌上に發表して好評を博したので、吳玉章、范文瀾兩氏と中國歷史研究室の同志の援助を得て完成したのだといふ。例言によれば、本書は舊來の歷史教科書の說に反對することに重きをおき、大衆下層人民の生活と鬭爭及び外族侵略者に反抗して鬭爭した英雄に注意し、同時にまた統治者階級の荒淫と無恥を暴露するにつとめた、讀者がすでにもつてゐるはずの斷片的な歷史知識を反省し整理するために、民間流行の歷史傳說や故事にもときとして言及したとある。

各編毎に初めに「簡明的提要」があつて一編の大意を總述し、各小節は大體において社會經濟政治の發展、意識形態、文學及び其他の順序で排列されてゐるが、各節がみな獨立の一篇をなしてゐる。例へば、武王伐紂——封建制度的開始——、霸王別姬——秦漢之際與漢の統一——、活書和死書打架——漢代經學古今文的鬭爭——、皇帝做和尚——佛教的起源與其傳入中國——、唐三藏取經——隋唐的對外交通——、梁山泊好漢——北宋的農民叛亂——、といった風に各節にそれぞれ小説や劇などからとつた大衆の興味をそるやうな主題と、説明的な副題とがある。敘述も簡明でなかなか面白く、大衆教育を目的とするものとしては成功してゐると思ふ。女

皇帝——武則天秉政——の一節をかいつまんでみると、次のやうな調子である。封建社會では男子が中心だが、武則天は中國史上唯一の女皇帝である。彼女は極めて聰明、吏治は清澄で、封建統治者の御用歴史學者でさへ、彼女が有能な女性であることを認めないわけにはいかなかった。しかし缺點もなかなか多く酷吏の周興や來俊臣を任用して、大規模な特務機關を組織した。……武則天の政治は女子の才能が決して男子に比して低くないことを事實を以つて證明したのであるが、しかし彼女は女子一般の地位を變改するやうなことは全くなかつたし、また出來もしなかつた。封建社會においては男女の地位平等のごときは、原來想像だも許されないことだったのである。他の節の模様も大體これによつておわかりになることと思ふ。

〔日比野丈夫〕

### 東洋農業經濟史研究

小野武夫博士還曆紀念  
論文集刊行會編

昭和二十三年五月 日本評論社刊  
A 2 判 一八一頁 價一〇〇圓

本書は「日本農業經濟史研究」「西洋農業經濟史研究」と共に農業史の大家小野博士の還曆紀念の三部作をなすものである、收むる所のは、加藤繁、滿洲に於ける大豆、豆餅生産の由來に就いて、柴三九男、古代支那農業史に於ける水の問題。藤井宏、明代龜田考。仁井田陞、支那近世同族部落の械闘。周藤吉之、清初に於ける圈地と旗地蠲量との

關係——特に畿輔旗地を中心として——。百瀬弘、津門保甲圖說に就いて——清代天津縣の農工商戶に關する一統計資料——。深谷敏鐵、李朝の民田について——朝鮮における土地所有の近世的性格。以上七氏の力作と其の偉業を目前に示すが如き博士の學蹟、年譜、著書、論文目錄とである。紙面の都合上各論文の批評は省略さしていただくが、いづれも戦前からの深い研究と緻密な考證を背景にち、所謂オーソドックスのものととして必讀の論文である。又、本書は東洋史と農業經濟學との兩者を結ぶ橋の役目を果すものであり、兩者の連繫が近時盛んとなつて來た社會經濟史の研究に與へる利益を考へる時には本書の持つ意義は更に増大しよう。然し其の役を果すには東洋史畑の人は論外として他の人々には少し縁の遠い感を懷しめはしないか、悪くゆくと東洋農業經濟史研究と言ふよりは東洋史農業經濟研究で終りはしないか（執筆筆者より見ても）尤も學界に於いては東洋史關係以外に中國の「農業社會史」が餘り興味が持たれてゐないから止むを得ないかも知れぬ。

〔米田賢次郎〕